

天理教 江南支部だより

発行先
発行日
発行責任者
発行住所

江南支部
立教189年 8月1日
九里正昭
甲賀町神1750番地の1
8月号 N0311

「おさじぶより」

さしづは何處からさしづ、皆理持った
るさしづ。席と言うたて、心映りて話
すれば、話する。人間心ある。人間心
持つては、舵という理は何處にあるか。
聞き分けてくれにやならんで。

(明治31・8・14)

去る6月30日、甲賀大教会を会場
に「滋賀教区婦人会員の集い」が催
された。当日は、各支部から大勢
の婦人会員が寄り集い活気あふれる
集いとなった。

全員で心を揃えおつとめがつとめ
られ、その後、清水このみ栗太分教
会支部長が「おつとめ」をテーマに
ユーモアを交え、分かりやすく熱の
こもったお話をされた。その後、お
たのしみコーナーやくじ引きが行わ
れ、各支部の紹介が行なわれ、その
支部の特産品などを景品に出され、
楽しいひと時を過ごした。

滋賀教区婦人会員の集いが開催



立教189年の「こどもお
ぢばがえり」(教会本部主
催)が7月27日、開幕した。

教祖140年祭が勤められ
た今年、また少年会創立6
0周年の節目を迎えるなか、
親里には開幕初日から、
たくさんの子供たちの笑
顔があふれた。

ただど有難い 奇跡

深谷善太郎著

奇跡というものは、山のようにあると思うのです。現に、大教会の祭典後のおさづけの取り次ぎで、「医者に余命二週間と宣告された方がご守護いただいた」「ガンが消えた」「手術をしなくて済んだ」「手術が大変うまくいった」「歩けなかった人が歩けるようになった」「膝が曲がらず座れなかった人が、座れるようになった」といった報告を、毎月のように聞かせていただきます。この教会だけでも、数々の奇跡を見せていただいているのです。

今日は、そういう奇跡の話ではなく、私たちが「いま、ここにいます」という奇跡の話をしたと思います。驚くようなご守護も奇跡です。しかし、そればかりではありません。むしろ本来、私たちが「いま、ここにいます」ということ自体が、奇跡的なご守護の真つただ中にいるということだと思うのです。たとえば、私は一歳のときに母を亡くしました。考えてみれば、母の出直

しが一年早ければ、私は生まれていないのです。私の母もまた、幼いときに祖母と死別しました。これもわずかな年出直すのが早ければ、母も生まれていません。私の家は信仰して五代目ですが、二代目の徳次郎も、生まれるのとほぼ同時に母を亡くして顔も知りません。五代目の私は、本当に奇跡的に、いま、ここにいます。それとても、四代前のこの教会の初代会長を務めた源次郎が信仰してくれたおかげで、こうしているわけで、そうでなければ百数十年前になくなっていく家なのです。さらに遡って、親神様がこの世人間をお創りくださったから今日まで、いつ

たい何人の親がいたのか分かりませんが、その親が一人でも欠けていたら、私はいま、ここにいないのです。私だけではありません。人は皆、自分が全く知らない親がいてくださったからこそ、いまがあるのです。また、過去から今日までの生命の営みだけでなく、いま、ここにある私たちの体を考えてもそうです。人間の体は、およそ六十兆個の細胞（最近三十

七兆といわれるようになりました）から成り立っています。しかし、この細胞が全部生きていたらいいというわけでもありません。細胞それぞれの寿命が来たときには、死んでもらわなければなりません。たとえば、血液の成分である白血球、血小板、赤血球は、それぞれ寿命が違います。数時間で死んでしまうものもあれば、十日生きるものもある。また、百二十日ほど生きていくものもあります。そして、死んでいくものの代わりに、新しいものが生まれてくるから、私たちは生きているのです。

親神様のご守護というものは、本当にきりがありません。人間をお創りいただいた以来、今日までに、どれほどのご守護を頂いてきたか。いま、ここにいますという事実のなかに、どれほどのご守護があるかと考えたら、どれだけお礼を申しても、し過ぎることはないと思います。

ですから、いま体が不自由で悩んでいる人も、お願いの前に、まずお礼を申し上げていただきたいのです。私た

ちは病気や事情で悩むと、必死になってお願いします。必死になってすがるといふのは大切なことです。このすがつてお願いする気持ちと同じくらい、お札が大切だと思うのです。私たちはつい、それを忘れます。山のようにご守護を頂いているのに、たった一カ所、

膝が痛い、そのことで思い悩みます。まず、親神様のご守護に対するお札をしつかりさせていたきたいものです。そのお札の仕方を、教祖は教えてくださいました。その第一が、おたすけです。世界中の人は皆、山のようにご守護を頂いていることを知らずに生きています。この教えは、信仰している人だけのものではありません。お道を信仰している者だけが兄弟姉妹ではないのです。世界中の兄弟姉妹に、一日も早く教えを伝え、親神様のご守護に共に感謝してもらえよう、つとめさせていたきたいと思います。



『みちのとも』より一寸いい話 教祖のお導きでもう一度お道へ

下田真理子 豊山分教会教人

この三年千日に、母と兄が出直しました。とてつもなく大きな節に際し、あらためて、教祖のひながたを手本に、どんなときも教祖のお心を悟る努力をすることを心定めさせていただきました。

未信仰家庭に育った私は、22歳のときに教会長の次男と結婚し、天理教を知りました。修養科、教人資格講習会と信仰の歩みを進め、娘も授かり、順風満帆でした。しかし、夫の転勤を機に教会から離れると、いつしか夫婦の間にすれ違いが生じ、10年後に離婚。同時に信仰からも離れてしまいました。数年後に再婚し、息子を2人授かりました。ところが、その夫が出張先で突然病死してしまったのです。失意のどん底のなか、元夫と一緒に教会で暮らしていた娘から、「お母さん、なんで教会に来ないの？ 来ればいいのに」と言われ、またお道につながりたいという気持ちが芽生えました。

その後、元夫や教会長夫妻にも温かく迎えていただき、義父だった前会長からは「娘が帰ってきたと思っている」

というありがたい言葉を頂いて、涙が流れました。

元夫とよりを戻したわけではありませんが、教会につながると、不思議なご守護をたくさん見せていただくようになりました。

たとえば娘の交通事故で、車が廃車になるほど損傷したのに本人は軽傷だったり、息子が自転車で信号待ちをしているところに車が突っ込んだときも、靴の側面にタイヤの跡が付いただけで済んだり。また、2年前に出直した母は、手術をするたびに、助からない命をたすけていただき、兄もまた、10年前にあと2、3年の命と宣告されながら、今年7月に出直すまで何度も命を取り留めました。

この三年千日の1年目には、家族そろっておちばに帰り、母は中席、兄一家は初席を運びました。それが最後の家族旅行でした。

いま思えば、あのときの娘や前会長の言葉を通して、教祖が私をもう一度お道へ引き戻してくださったのだと思います。そのおかげで、母や兄におさ

づけを取り次がせていただくことができました。

いま、周りの人たちと健康に過ごせる日々に感謝し、この三年千日、たゆまず教祖のひながたを歩んでいきたいと思ひます。

教区啓発委員会の現地研修会が7月1日開催され、支部から6名が参加した。

本年は、全国でも最大規模の被差別地域である京都崇仁地区を訪ね、京都市立芸術大学の崇仁地区への移転を受け「変わりゆく崇仁地区」をテーマにお話を聞かせて頂き、周辺をフィールドワークした。午後からは、河原町大教会を参拝。その後、秀司先生が慶応3年に公許を願い出られた、吉田神祇官領ゆかり吉田神社を訪ねた。



にをいがけ勉強会

開催：8月30日（日）

全教一斉にをいがけデーを目前に控え
教区の仲間と共に、あなたにも出来る
にをいがけの実動を！！



講師：西村 和久先生（一筋分教会長）

会場：教務支庁

（大津市松本2丁目12番20号 ☎077-532-8054）

対象：教会長・布教所長・よふぼく

時間：9：30 受付

10：00 開会

15：00 閉会

内容：【午前】講話 【午後】にをいがけ実動とねりあい

参加御供：500円（昼食代含む）

申し込み：下記の参加申込書、もしくは右記のGoogleフォームにてお申し込みください。

申込〆切：8月20日

にをいがけ勉強会



入力フォーム

滋賀教区布教部

8月支部にをいがけデー

8月28日（金曜日）拠点教会 鹿深分教会 甲南町高野1525番地

9月支部ひのきしんデー

9月4日（金曜日）午前9時～11時30分

甲賀学園 鹿深の家 草刈りひのきしん